

あのひと このひと

はぐめに

枚方市議会報は、本市議会の活動状況を市民にわかりやすく伝えるとともに、市議会に対する理解を深めていただくことを目的に発行していますが、市民に興味を持って読んでいただけるよう季節の写真やコラムを掲載するなど、親しまれる議会報をめざして編集しています。

平成18年8月1日号で連載を終了したコラム「あんなとこ こんなトコ」の後を受け、平成20年1月1日号から掲載を開始した「あのひと このひと」は、歴史上有名・無名を問わず、枚方ゆかりの人物にスポットを当て、わかりやすく紹介するコラムです。掲載は不定期ですが、ホームページにも順次アップしていきますので、ご覧ください（スペースの関係で紙面では掲載できなかった写真を、ホームページでは適宜追加しています）。



- その 1 在原業平
- その 2 井上桐亭・金橋
- その 3 今中楓溪
- その 4 近江毛野臣
- その 5 岡田本房
- その 6 岡田 逸
- その 7 織田信長
- その 8 貝原益軒
- その 9 片桐且元
- その 10 桓武天皇
- その 11 行基
- その 12 空海
- その 13 久貝正俊
- その 14 久貝正典
- その 15 楠葉西忍
- その 16 百済王敬福
- その 17 繼体天皇
- その 18 ケンペル
- その 19 五兵衛
- その 20 惟喬親王
- その 21 シーボルト
- その 22 実従
- その 23 申維翰
- その 24 菅原道真
- その 25 田中家信
- その 26 宗覚

掲載写真一覧表

小見出し		No.	標題	提供者
その 1	在原業平	1	渚院跡に建てられた歌碑（渚元町）	—
その 2	井上桐亭・金橋	2	二ノ宮神社（船橋本町 1 丁目）	—
その 3	今中楓溪	3	楓溪の歌集「白日」「青潮」と、主宰していた短歌会の機関誌など	—
その 4	近江毛野臣	4	枚方あたりの淀川	—
その 5	岡田本房	5	片埜神社南門（牧野阪 2 丁目）	—
その 6	岡田 逸	6	岡田 逸直筆の短冊	市史資料室
その 7	織田信長	7	昭和 29 年の招提	市史資料室
その 8	貝原益軒	8	獅子窟寺付近からの眺め	—
その 9	片桐且元	9	片埜神社本殿（牧野阪 2 丁目）	—
		10	二ノ宮神社本殿（船橋本町 1 丁目）	—
その 10	桓武天皇	11	百済王氏の氏寺跡とされる特別史跡百済寺跡（中宮西之町）	—
その 11	行基	12	久修園院（楠葉中之芝 2 丁目）	—
その 12	空海	13	東高野街道（写真は出屋敷付近）	—
その 13	久貝正俊	14	正俊寺石造十三重塔（長尾宮前 2 丁目）	文化財課
その 14	久貝正典	15	久貝正典が詠んだ歌の短冊	文化財課
その 15	楠葉西忍	16	石清水八幡宮本殿	—
その 16	百済王敬福	17	桜が満開の百済寺跡（写真奥は百済王神社）	—
その 17	継体天皇	18	樟葉宮跡の伝承地（場所は楠葉丘 2 丁目）	—
		19	福井市の足羽山公園にある継体天皇像	文化財課
その 19	五兵衛	20	淀川（写真手前）へと続く赤井堤防の面影がかすかに残る本市と寝屋川市の市境となる道路（写真中央）	—
その 20	惟喬親王	21	渚院跡とされる旧観音寺の鐘楼と梵鐘（場所は渚元町）	—
その 21	シーボルト	22	現在の淀川の景観	—
その 22	実従	23	御坊山にある実従の墓とされる石塔（場所は枚方元町 4）	—
		24	意賀美神社の梅	—
その 23	申維翰	25	淀川の河岸	—
その 24	菅原道真	26	蹉跎神社の社殿	—
その 25	田中家信	27	廃渚院観音寺の梵鐘	—
		28	旧田中家鋳物民俗資料館の鋳物工場展示室	文化財課

その 26	宗覚	29	境内の愛染堂に祀られている愛染明王坐像	文化財課
		30	天球儀	文化財課
		31	地球儀	文化財課

※提供者は提供当時の部署（― は市議会事務局が撮影）



その 1

在原業平

—ありわらのなりひら—

(平成20年 1 月 1 日号—第252号)



私たちのまち枚方には、古くからさまざまな人が住み、あるいは通り過ぎて行きました。このコラムでは、こうした枚方ゆかりの人物を紹介していきます。

最初に取り上げる在原業平は、平安時代初期の歌人で、『伊勢物語』の主人公と考えられています。阿保[\[あぼ\]](#)親王の子で平城[\[へいぜい\]](#)天皇の孫に当たりますが、当時、権勢を誇っていた藤原氏と縁戚関係がなかったため、政治的には不遇でした。

同様の境遇にあった惟喬[\[これたか\]](#)親王との交友は『伊勢物語』にも描かれています。それによると、親王の別荘渚院[\[なぎさのいん\]](#)にやってきた一行は、桜の下で宴を開き、和歌を詠みました。このときに業平が詠んだ「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌は『古今和歌集』にも収録され、桜の花を賛美した名歌として親しまれてきました。渚院を後にした親王の一行は天の川のほとりに至り、またも宴を開きました。親王が「交野で狩りをして、天の川のほとりに至ったことを題材に歌を詠め」と命じると、業平は「狩り暮らし棚機[\[たなばた\]](#)つ女つめ[\[たなばたつめ\]](#)に宿からむ天の川原かわら[\[かわら\]](#)に我は来にけり」と詠みました。現実の天の川を天上の天の川になぞらえた業平の機知に意表をつかれたのか、親王はこの歌を繰り返し暗誦するばかりで、返し歌もできないほどでした。

惟喬親王と業平の交遊の場となった渚院の跡には、後に観音寺が建てられましたが、明治3年に廃寺となりました。現在は旧観音寺の鐘楼と梵鐘が残るのみで、両者とも市の有形文化財に指定されています。



渚院跡に建てられた歌碑(渚元町)



その2

井上桐亭・金橋

—いのうえとうてい

きんきょう—



(平成20年5月1日号—第254号)

船橋の二ノ宮神社は、慶長8年(1603)に豊臣秀頼[\[とよとみひでより\]](#)が大坂城鬼門[\[きもん\]](#)除けのため、片桐且元[\[かたぎりかつもと\]](#)を奉行として本殿等を修理させた由緒ある神社です。また当社の神主を務めていた井上家も、最近発見された戦国時代初期の古文書に、すでにその名が見える由緒ある家です。

享保から天明期(1716～1789)に神主を務めていたのが、井上桐亭・金橋父子でした。ともに詩歌にすぐれ、のちに輩出する坂村の岡田本房[\[ほんぼう\]](#)・逸[\[いつ\]](#)、三浦蘭阪[\[らんぱん\]](#)らへの影響も大きく、寛政期(1789～1801)に活躍する当地文人グループの先駆であり、中心的存在となります。

桐亭は、その死後、孫たちによって詩集『桐亭遺稿』が刊行され、その作風が知られますが、金橋の遺作は散逸し、ほとんど知られていませんでした。

ところが、昭和46年に金橋のものを含む二ノ宮神社奉納歌が見つかりました。確認された奉納歌は435通、奉納者は岡田本房や三浦義方・蘭阪父子など47人以上に上りますが、金橋の奉納歌は135通あり、その数は群を抜いています。

さらに近年、三浦家に伝えられた古文書の中からも桐亭・金橋や義方・蘭阪らの和歌が数多く発見されました。それらには歌会の場所など、さまざまな情報が書き込まれています。例えば、三浦義方作の和歌には、井上家で詠み、そこに招かれた公家が添削をしたという注記があり、文人グループの具体的な活動の様子が浮かび上がってきます。



二ノ宮神社(船橋本町1丁目)



その3

今中 楓溪

—いまなかふうけい—

(平成20年 8 月 1 日号—第256号)



「野崎参りは屋形船でまいろ どこを向いても菜の花ざかり」

昭和10年、東海林[しょうじ]太郎の歌声により爆発的に流行し、全国を風靡[ふうび]した「野崎小唄」。この作詞者が今中楓溪です

明治16年、大阪府河内郡水走村(現・東大阪市)に生まれた楓溪は、少年時代から文筆に親しみ、漢詩や短歌などを文学雑誌に盛んに投稿していました。同39年に広島高等師範学校を卒業し、県内で中学教員として1年間勤務後、同40年、栃木県立大田原中学校に転任、高等師範学校入学後中断していた詩作をこのころから再開しました。また、同年樟葉村の今中家を継ぎました。

同44年、北河内郡立河北高等女学校(昭和3年に寝屋川高等女学校と改称)に首席教諭として赴任し、以後、昭和12年に退職するまで、同校の支柱となり、北河内の女子教育を支えました。



楓溪の歌集「白日」「青潮」と、主宰していた短歌会の機関誌など

歌人としての活動は、大正14年に最初の歌集「あかね」を刊行。その後、「白日」「青潮」を刊行し、評価を不動のものとししました。さらに昭和7年から、女性短歌会「若菜短歌会」を主宰し、機関誌「若菜」を発行しました。

楓溪の創作分野は、短歌だけにとどまらず多岐にわたります。北河内郡内の学校校歌には、彼の作詞によるものが多く、枚方市内では樟葉小・枚二小・一中・二中・三中の校歌が確認できます。



その4

近江毛野臣

—おうみのけなのおみ—

(平成21年5月1日号—第260号)



「ひらかたゆ笛吹き上る近江のや毛野の稚子[わくご]い笛吹き上る」

毛野は、近江を本拠としたと考えられる継体[けいたい]期(6世紀前半)の武将です。継体天皇21年(527)、新羅[しらぎ]の圧迫を受けた朝鮮半島南部の加耶[かや]諸国からの援軍要請を受け、毛野が派遣されます。このとき、九州北部で勢力を誇っていた筑紫国造磐井[つくしのくにのみやつこいわい]が、新羅と結んで毛野の軍勢の渡航を妨害(磐井の乱)しましたが、翌年、物部麁鹿火[もののべのあらかい]によって磐井の乱は鎮圧され、毛野は海を渡ります。しかし、彼の地で毛野は成果を上げることができず、同24年、召還される途中の対馬で病死しました。

船に乘せられた亡骸[なきがら]が、その子どもたちに伴われ近江に向かって淀川をさかのぼります。知らせを聞いて近江から迎えに来た毛野の妻は、枚方あたりで葬送の笛を奏でる船に出会い、悲嘆にくれて冒頭の歌を詠みました。

歌にある「ひらかた」は『日本書紀』では「比羅智駄」と記されていますが、当地枚方のことと考えられ、これが地名枚方の初出とされています。

ただし、毛野の妻が歌を詠んだのは近江に入った後とし、「ひらかた」は近江国坂田郡平方(現長浜市平方町)を指すという説もあります。



枚方あたりの淀川



その5

岡田本房

—おかだほんぼう—

(平成21年8月1日号—第262号)



岡田家は、代々坂村一宮【いちのみや】(片埜神社)の神主を務めています。本房は、寛延3年(1750)岡田正時の3男として生まれ、早くから領主水野忠敏【ただたか】に仕えます。19歳のとき江戸詰めを命じられ、35歳で家老になりました。帰郷後、河内・大和・近江に散在する水野領の代官として坂村の水野家陣屋で執務しますが、長兄・次兄の死去により一宮の神主を継ぎ、両務を兼職しました。

代官としての彼は領民にやさしく、清廉・潔白で自己に厳しく、常に領民に慕われ、広く「賢宰」【けんさい】と称されたと言われています。

一方、彼は幼少より学問を好み、江戸では海保青陵【かいほせいりょう】(経世家)に師事し、帰郷後は江村北海【えむらほっかい】(漢学者)と交わるなど、儒学・詩歌などに通じるとともに、私塾を開き門弟の教化にも携わっていたようです。

船橋村二ノ宮神社の井上金橋【きんきょう】とは生涯を通して深い親交を結んでおり、金橋の没後、金橋評伝とも言える『酔花軒主人行状』を著しています。

また、本房の著作『岡氏家訓』『岡氏家訓後編』の2書は、修身齐家【しゅうしんせいしか】の書として領主から賞賛され、他にも『鶴鳴詩鈔』【かくめいししょう】『鶴鳴文抄』『雪乃明仄』【ゆきのあけぼの】などが現存しており、彼の多才ぶりがうかがえます。



片埜神社南門(牧野阪2丁目)



その6

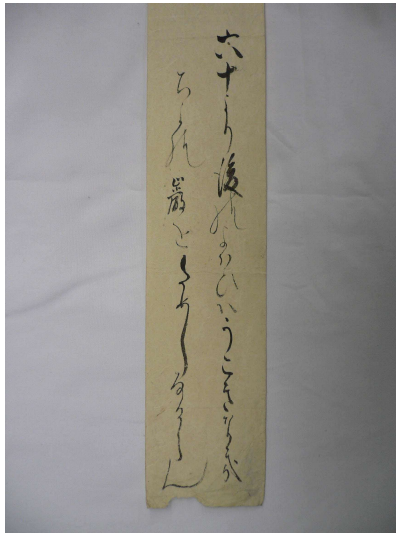
岡田 逸

—おかだいつ—

(平成21年11月 1 日号—第263号)



逸は、小磯平左衛門の娘として京都に生まれました。花山院常雅[\[かざんいんときまさ\]](#)の娘敬姫[\[けいひめ\]](#)に仕え、重用されます。明和8年(1771)敬姫が、蝦夷[\[えぞ\]](#)松前藩主松前道弘に嫁ぐ際、聡明さを買われ、侍女として同行しました。しかし、安永6年(1777)敬姫が亡くなったため、逸は同僚2人とともに京都へ帰ります。のち、岡田本房[\[ほんぼう\]](#)（前号参照）に嫁ぎ、寛政2年(1790)松前からの帰途の様子を、道中で詠んだ61首の和歌を交えて著した紀行文『於おくのあら海』を刊行しました。この書は、当時、広く読まれたと考えられ、現在では『江戸時代女流文学全集』第3巻におさめられています。



岡田逸直筆の短冊
(市史資料室所蔵)

江戸後期の文人・紀行家として著名な菅江真澄[\[すがえますみ\]](#)は、天明8年(1788)から松前に逗留し、藩主道弘の継母文子[\[あやこ\]](#)を初め、藩上層の家臣と和歌を介して頻繁に交わっていました。文子の館で歌会が盛んに開かれた様子は、彼の歌日記『ちしまのいそ』に記されていますが、しばしば河内国二ノ宮法楽[\[ほうらく\]](#)和歌と同じ歌題で詠んでいます。このことは、和歌を通して文子と逸の交流が続いたことを示唆しており、翻ってみれば、船橋村の二ノ宮神社を中心とした当地の文人グループの活発な活動を裏づけるものでもあります。

※松前での歌会の様子や文子と逸との交流は、細川純子著『ちしまのいそ』の和歌世界〈『真澄学』第4号所収〉を参考にしました。



その7

織田信長

—おだのぶなが—

(平成22年2月1日号—第265号)



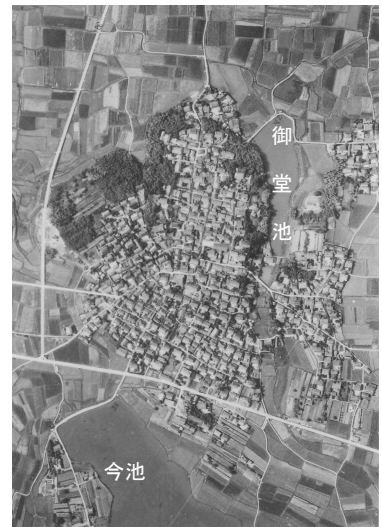
明応5年(1496) 蓮如[れんにょ]が摂津大坂に建立した御坊は、天文元年(1532)山科本願寺が焼き討ちされて以後、大坂(石山)本願寺として浄土真宗の本山となりました。寺内町[じないまち]が点在する枚方地方は、淀川舟運により大坂本願寺と直結しており、真宗勢力の有力拠点となりました。

天下統一をめざす織田信長は大坂の地を重要視し、本願寺に矢銭[やせん]5000貫を課しただけでなく、その地の明け渡しをも要求していました。本願寺顕如[けんによ]は信長と戦う決意を固め、元亀元年(1570)6月信長が浅井・朝倉連合軍と姉川で戦っているすきに乗じて7月摂津に布陣した三好三人衆と連携する形で反信長の旗幟[きし]を鮮明にし、ここに11年にわたる合戦の幕が切って落とされました。

信長は3万余の軍勢を率いて上洛し、8月25日には枚方寺内に陣取、翌26日天王寺に本営を構えました。

その行路に当たる招提寺内は、本願寺に味方しない姿勢を示したため、9月には信長から安堵状[あんどじょう]が下されました。招提寺内と信長とのこうした関係は、この後も続いたらしく、元亀3年には柴田勝家・佐久間信盛連署[れんしよ]の禁制が招提寺内に下付されています。

一方、信長が枚方寺内に陣取ったのは、枚方寺内が信長に敵対したためと考えられます。平成14年、大隆寺(枚方元町)境内で行われた発掘調査で、枚方寺内の油屋の甕[かめ]倉と見られる遺構が見つかりましたが、備前焼の大甕の多くが人為的に破壊された状況で検出され、建物跡も焼土層で覆われているなど、信長陣取との関連が注目されています。



昭和29年の招提
(市史資料室所蔵)



その8

貝原益軒

—かいばらえきけん—

(平成22年5月1日号—第266号)



貝原益軒は、江戸時代前・中期に活躍した儒学者・博物学者・大衆教育家で、寛永7年（1630）福岡藩祐筆[ゆうひつ]の子として福岡に生まれました。長らく損軒[そんけん]と号していましたが、79歳のときに益軒と改めました。

彼の著作は数多くありますが、『筑前国続風土記』[ちくぜんのくにしょくふどき]『大和本草』[やまとほんぞう]『養生訓』[ようじょうくん]などは特に有名です。また、生涯を通じて各地を旅し、数々の紀行文を著しています。

元禄2年（1689）京都に滞在していた彼は、河内・和泉・紀伊・大和の名所をめぐる旅に出かけます。その様子を記したのが『南遊[なんゆう]紀行』です。京都から淀・八幡を経て洞ヶ峠を越え河内に入り、田口・郡津を過ぎ、私市に宿ります。翌日、獅子窟寺[ししくつじ]に登り、天野川を見下ろした様子を次のように記しています。

「その川、東南に直[すぐ]（まっすぐ）に流れ、砂川にて水少なく、その河原白く広く長くして、あたかも天上の銀河の形のごとし。[中略]天の川と名付けしこと、むべなり（もっともだ）。」

その後、諸国をめぐる京都への帰途、枚方宿に一泊しました。

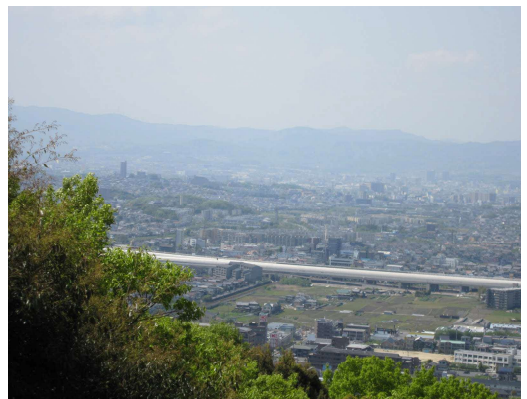
江戸時代を通じて、枚方は「牧方」と表記されることが一般的でした。読みはもちろん「ひらかた」です。彼は、これを誤りととらえ、次のように記しています。

「世俗あやまって牧方と書く。枚の字を書くべし。一枚二枚を一[ひと]ひら二[ふた]ひらと訓ず。」

しかし、「牧方」の表記は「枚」の異体字として「牧」が用いられていたもので、あながち誤りとは言えません。

天野川の南岸に宿をとった彼は、在原業平[ありわらのなりひら]の歌「かりくらし たなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり」を思い起こして、興に入っています。

翌日、禁野・渚を通り、藤原俊成[ふじわらのしゅんぜい]や業平の歌に思いをはせ、京都へ帰りました。



獅子窟寺付近からの眺め



その9

片桐且元

—かたぎりかつもと—

(平成23年2月1日号—第271号)



片桐且元は安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した武将で、弘治2年（1556）、近江の浅井氏配下の小領主・片桐直貞[なおさだ]の長男として生まれました。

天正元年（1573）、浅井氏は織田信長により滅ぼされ、その後、且元は長浜城の羽柴秀吉に仕えました。

天正11年に秀吉が柴田勝家と争った賤ヶ岳[しずがたけ]の戦いで活躍し、加藤清正や福島正則らとともに「賤ヶ岳七本槍」[しちほんやり]の一人に数えられています。

秀吉の死後は秀頼を補佐し、徳川方との対立回避に尽力しました。

関ヶ原の戦いの後、秀頼は家運挽回を願い、畿内諸国で社寺の造営・修復を盛んに行いました。

このような背景のもと、片埜[かたの]（一宮）[いちのみや]神社（牧野阪2丁目）と二ノ宮神社（船橋本町1丁目）は、大坂城鬼門鎮護の社として、且元が奉行となって再建されたものです。

慶長7年（1602）、建築の片埜神社本殿は三間社流造[さんげんしゃながれづくり]で、極彩色の彫刻を施すなど桃山時代の建築様式がよく残り、昭和25年に国の重要文化財に指定されました。現在、平成23年9月までの予定で、桧皮葺[ひわだぶき]の屋根の葺きかえや彩色などの修復工事が行われています。



片埜神社本殿(牧野阪2丁目)



二ノ宮神社本殿（船橋本町1丁目）

一方、二ノ宮神社本殿は慶長8年の再建で、且元在判の棟札[むなふだ]が残されています。現在の本殿は正徳3年（1713）の建築ですが、慶長再建本殿の様式をよく踏襲したものと考えられています。

慶長19年、方広寺[ほうこうじ]の鐘銘を巡って豊臣・徳川の対立が激しくなると、且元は家康との交渉に奔走しますが、淀殿らから家康との内通を疑われ、やむなく大坂城を退去し、家康に味方することになります。大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、間もなく且元も世を去りました。



その10

桓武天皇

—かんむてんのう—

(平成23年8月1日号—第274号)



桓武は天応〔てんのう〕元年(781)に即位すると、翌年には奈良・平城京を去る方針を明らかにし、都を長岡京(現在の向日市・長岡京市など)へうつしました。この遷都の大事業をなし得たことを天神の恩恵によるものとして、都の南に郊祀壇〔こうしだん〕と呼ぶ土壇を設け、感謝の祈禱を行いました。延暦6年(787)の冬至には、同地で北極星をまつり、国家の安泰を祈りました。このように郊祀壇を設けて祭祀を行うことは、中国の皇帝が天壇を設けて天神をまつる例にならったもので、日本ではこれが最初です。

郊祀壇の場所は交野柏原との記録があり、杉ヶ本神社(片鉾)周辺、片埜神社(牧野阪)周辺などが推定地となっています。また、交野天神社(楠葉丘)の縁起によると、同社はこの郊祀壇跡に造営したとしています。

また、桓武の母である高野新笠〔たかののにいがさ〕が百済武寧王〔ぶねいおう〕につながる渡来系氏族の出身であったため、百済義慈王〔ぎじおう〕の後裔である百済王〔くだらのこにきし〕氏に対しては身内のような親近感を表しており、「百済王等は朕が外戚なり」と詔〔みことり〕を下して同氏らの位階を進め、百済寺に対しても、稲や綿などをたびたび施しています。

桓武は鷹狩りを大変好んでおり、当時、多くの鳥獣が生息する風光明媚な地として知られ、百済王氏の本拠でもあった交野ヶ原でたびたび遊猟しました。この地には、庶民が狩りをすることを禁じた禁野と呼ばれる朝廷の狩場が設けられ、現在でも禁野という地名が残ります。

また、交野行幸〔ぎょうこう〕の際には、楠葉にあったとされる右大臣藤原継縄〔ふじわらのつぐただ〕の別荘を行宮〔あんぐう〕としたとされるほか、禁野あるいは中宮に行宮を造営したと考えられています。



百済王氏の氏寺跡とされる
特別史跡百済寺跡(中宮西之町)



その11

行基

—ぎょうき—

(平成23年12月 1 日号—第275号)



行基は奈良時代の僧で、当時禁じられていた民衆への伝道を各地で行ったほか、開墾、かんがい、架橋といった社会事業にも数多く取り組んだため、その足跡は畿内及び周辺に数多く伝わります。

天智7年（668）、行基は堺市にある家原寺の地で渡来系の家に生まれたといわれます。出家後は、唐で玄奘〔げんじょう〕の教えを受けた道昭〔どうしょう〕に師事し、伝道や社会事業の活動に触れました。

行基が畿内各地に創建した寺院は、行基四十九院と呼ばれ、そのうち三院が枚方市内にあったとされますが、現在でもその名が残るのは、神亀2年（725）創建の久修園院〔くしゅうおんいん〕（楠葉中之芝）のみです。残る二院は、茨田〔まんた〕郡伊香〔いかが〕（現在の伊加賀地域）の救（枚）方院と薦田〔こもだ〕尼院ですが、詳しい場所などはわかっていません。

久修園院の創建と同時期、行基は橋本（八幡市）と対岸の山崎（大山崎町）を結ぶ山崎橋を淀川に架けました。橋本の地名はこの橋のたもとに由来するものです。

また、役務に徴用された地方の農民たちに旅宿や食糧を与える施設として、畿内の9カ所に布施屋を設置しましたが、その一つが楠葉に設けられました。具体的な場所は明らかではありませんが、嘉禎4年（1238）の交野天神社棟札からは、楠葉地域のうちに布施辻という地名があったことがわかります。

僧侶を国家の統制下に置こうとしていた朝廷は、こうした行基の自由な活動を当初は弾圧していましたが、民衆の絶大な支持を集めていたことから方針を改めます。そして東大寺の大仏造立に当たって寄附を集める勸進職として協力させ、その功績から大僧正の位を贈りました。しかし、天平21年（749）、行基は大仏の開眼〔かいげん〕を待たずして、奈良・菅原寺で入滅しました。



久修園院（楠葉中之芝2丁目）



その12

空 海

—くうかい—

(平成24年 2 月 1 日号—第277号)



空海（弘法大師）は、平安時代初期の僧で、真言宗の開祖として知られ、全国各地に足跡や伝説が数多く伝わります。また、書にも優れ、橘逸勢〔たちばなのはやなり〕と嵯峨天皇とともに三筆〔さんびつ〕の一人としても有名です。

宝亀5年（774）生まれの空海は、讃岐国多度郡〔たどのこおり〕弘田郷（香川県善通寺市）の豪族である佐伯家出身で、幼名を眞魚〔まお〕といました。18歳の時に都の大学寮に入り、儒学を学びましたが、その後、密教に触れて仏道を求め、大学を出て奈良・吉野の金峯山〔きんぷせん〕や四国の石鎚山などで山林修行に励んだといます。

延暦23年（804）には遣唐使の留学僧として唐へ渡り、わずか2年という短期間で密教を修めました。帰国後、弘仁〔こうにん〕7年（816）に、鎮護国家の祈念や修行者のための道場として、勅許を得て高野山金剛峯寺を開創し、弘仁14年（823）には、嵯峨天皇から東寺（教王護国寺、京都市南区）を賜り、ここを真言密教の根本道場としました。

この東寺と高野山を結んだのが東高野街道で、枚方市域では、洞ヶ峠から高野道・出屋敷・池之宮の四辻を経て茄子作を通過します。このような歴史的背景も影響して、市域には空海にまつわる伝承が数多く残ります。

例えば出屋敷には、空海が千度詣〔せんどもうで〕の際に休憩したと伝わる円通寺があります。また、楠葉や田口（出屋敷）では、空海が錫杖で井戸を掘り当てたという話が残るとともに、山之上でも、空海が野宿をした林が、「蚊入らずの林」と呼ばれるようになったという伝承があります。

空海は、承和2年（835）に高野山で示寂〔じじやく〕し、のちに醍醐天皇から弘法大師の諡号〔しごう〕が贈られました。



東高野街道（写真は出屋敷付近）



その13

久 貝 正 俊

—くがいまさとし—

(平成25年 5 月 1 日号—第284号)



久貝正俊 [くがいまさとし] は、江戸時代の旗本で、元和 5 年（1619）に大坂東町奉行に任命され、病死する正保 5 年（1648）までその職にありました。

大坂町奉行は、幕府が直轄領のうち重要都市の政務に当たさせた遠国[おんごく]奉行の一つで、警察・司法・行政をその任務とし、嶋田直時 [しまだなおとき]（西町奉行）とともに、正俊が東町奉行に任命されたのが、その始まりとされています。

このとき、正俊は、交野郡（現在の枚方市、交野市の一部）の倉治、津田、藤坂、杉、片鉾、田口の各村に知行地を与えられ、1500石が加増されました。その後、寛永 10 年（1633）には、讃良郡[さららぐん]（現在の四條畷市、大東市、寝屋川市の一部）の中野、薮屋[しとみや]などの諸村に2000石を加えられ、それまでの石高とあわせ、5000石を領有しました。

寛永 20 年（1643）には、家臣である細谷善兵衛 [ほそやぜんべえ] に命じて、八田広[はったひろ]と呼ばれ、荒れ果てていた土地を再開発しました。その土地は、翌年、福岡村と名づけられ、貞享 3 年（1686）に長尾村と改称されました。元禄 2 年（1689）には、正俊からは 3 代目となる久貝正方[くがいまさかた]が長尾村に陣屋を設け、代官を配置して領地の支配に当たらせました。

正俊は、76 歳で亡くなり、中宮に葬られたとの記録が残っており、現在、堂山東町にある墓が正俊の墓とされ、殿様墓と呼ばれています。

正俊が亡くなった翌年には、久貝正世 [くがいまさよ] が父である正俊を弔うため、長尾村に久貝家の菩提寺を建立し、父の名を冠して、長尾山正俊寺 [しょうしゅんじ] と命名しました。

同寺の建立に際し、知行地であった中野村にある正法寺の釈迦如来座像と石造十三重塔を移しました。この石造十三重塔は現在もなお正俊寺（長尾宮前）の境内にあり、鎌倉時代の造立当初の姿をよくとどめているとして、大阪府文化財に指定されています。



正俊寺石造十三重塔
(長尾宮前 2 丁目)



その14

久貝 正典

—くがいまさのり—

(平成26年 5 月 1 日号—第290号)



久貝正典[くがいまさのり]は、江戸時代後期の旗本で、文化4年（1807）に生まれました。久貝家は交野郡（現在の枚方市、交野市の一部）に知行地を有し、長尾に設けた陣屋に代官を配置して領地の支配に当たらせました。

正典は、初代正勝[まさかつ]から数えると 11 代目に当たり、幕臣として重要な役割を担い、安政5年（1858）には、大目付に任ぜられました。

このころ、幕府の大老であった井伊直弼[いいなおすけ]は、勅許のないまま日米修好通商条約を締結した後、こうした動きに反発する攘夷派や次期將軍の擁立問題における対立派の処分に乗り出します。これがいわゆる安政の大獄です。

このとき正典は、久貝家と井伊家との間に250年来のつながりがあったことから、直弼の意向を踏まえ、攘夷派などの反対派を吟味するための五手掛[ごてがかり]として処分を下しました。

こうした対応への不満から直弼が暗殺されると、幕府は方針を転換し、文久2年（1862）には、安政の大獄等に関与した者を処罰しました。正典も、5500石のうち2000石の削減と差控[さしひかえ]を命じられました。

その後、元治元年（1864）に正典は再び幕府の要職につき、慶応元年（1865）には1000石を回復しましたが、まもなく世を去ります。

幕府内の権力の移り変わりにほんろうされた人物でしたが、辞世に「せまり来る冥路の使しばし待て公の事いまだ成しはてず」と詠み、いまわの際にも幕臣としての忠誠を忘れなかったことがうかがえます。

また、正典は母の父である堀田正敦[ほったまさあつ]から和歌について薫陶を受けたと考えられ、歌人としての一面を持っていました。村田春海[むらたはるみ]の門人の小林歌城[おばやしうたぎ]に師事し、養翠と号して多くの作品を残しており（写真参照）、緒方洪庵[おがたこうあん]とも歌を通じて交流があったといえます。

黒船の来航以来、外圧への備えが取りざたされる中、幕府は農兵の養成を指令します。久貝家でも代官が農民を指導し、射撃訓練を行いました。春日神社（津田元町）にはその時の的が奉納額として絵馬堂に納められており、正典が生きた時代の緊迫した様子が今に伝わります。



久貝正典が詠んだ歌の短冊
文化財課市史資料室所蔵

春曙
うつりかの月もろともにうすれなハ
（移り香）
いかゝハすへきはるのあけほの正典
（華の曙）



その15

楠葉 西忍

—くすばさいにん—

(平成27年 2 月 1 日号—第295号)



楠葉西忍[くすばさいにん]は、室町時代の商人で、応永2年（1395）に生まれました。

西忍の父は、聖[ひじり]という名の天竺[てんじく]人で、足利義満[あしかがよしみつ]の時代に来日し、応安7年（1374）に相国寺[しょうこくじ]で義満と会見しました。聖は、唐人蔵[とうじんぐら]と呼ばれる土倉[どそう]を営んだとみられ、主に商人として活動しました。

その後、交野郡楠葉村の女性を妻とし、二人の間に男の子が生まれました。幼名をムスルといい、長じて母方の里名である楠葉を姓とし、俗名を天次[てんじ]、出家してから西忍と称するようになりました。

聖と楠葉の地を結びつけた事情は明らかではありませんが、楠葉が古代から水陸交通の要衝として栄えていたことや、石清水八幡宮の保護を受けて商業活動を行う楠葉神人[じにん]の存在等があったのではないかと推察されます。



石清水八幡宮本殿

父である聖とともに、西忍は、義満のもと、京都で対外貿易を推進する役割を果たしていたと考えられています。

しかし、次の将軍足利義持[あしかがよしもち]の上意に背いたため、西忍は聖とともに一色[いっしき]氏に預けられ、父の死後によりやく許されて奈良に移りました。

西忍は、そこで興福寺の別当[べっとう]であった経覚[きょうかく]と出会い、興福寺の保護のもと、遣明船による2度の中国渡航など、新たな活動を開始しました。

とくに、享徳2年（1453）の2度目の渡航では、その準備を取り仕切り、費用の調達から、商品の手配、貿易船の借用などにその手腕を発揮したといえます。

こうした経験を通じ、西忍は当時の日本を代表する貿易商人になったと評価されています。



その16

百済王 敬福

—くだらのこにきしきょうふく—

(平成27年5月1日号一第296号)



桜の名所としても知られる百済寺跡[くだらでらあと]（中宮西之町）は、百済王[くだらのこにきし]氏の氏寺として建立された寺院の跡で、府内に2カ所しかない特別史跡に指定されています。

百済王氏とは、百済[くだら]の王族の末裔[まつえい]で、奈良時代から平安時代にかけて活躍した貴族です。

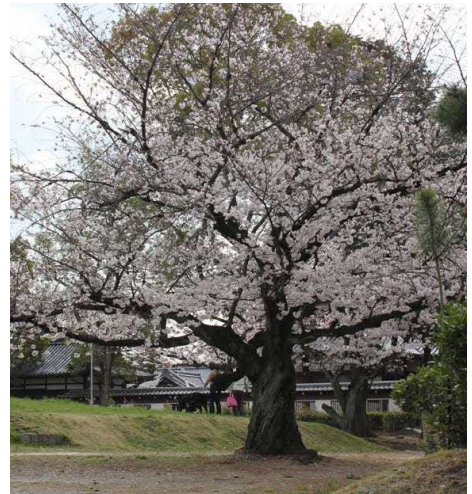
そもそも、古代の朝鮮半島では高句麗[こうくり]、百済、新羅[しらぎ]の三国が覇権を争っていましたが、新羅と唐の連合軍によって百済が滅ぼされたとき、倭国（日本）に王子の豊璋[ほうしょう]・禪広[ぜんこう]（善光）の二人が滞在していました。倭国は、兄の豊璋を国王に擁立して再起を図る百済の遺臣とともに挙兵するものの、大敗しました。いわゆる白村江[はくすきのえ]の戦いです。

このとき、倭国にとどまった弟の禪広は朝廷に重んじられ、持統天皇のときに、百済王という氏姓を賜り、一族は一流貴族としての待遇を受けたとされます。

また、百済寺跡の北方に広がる禁野本町遺跡では、百済寺跡の中心軸に一致する南北道路とそれに交差する東西道路が検出されるなど、百済王氏が計画的にまちづくりを行ったと考えられます。

天平21年（749）、禪広のひ孫にあたる百済王敬福[くだらのこにきしきょうふく]は、陸奥守[むつのかみ]のとき、東大寺の大仏造立に際し、陸奥国小田郡（現在の宮城県遠田郡涌谷町）で産出した黄金を聖武天皇に献上しました。この功績によって敬福は7階級特進、従三位[じゅさんみ]にまで位階を進め、宮内卿[くないきょう]に任ぜられました。さらに、河内守[かわちのかみ]を兼務することとなり、百済王氏一族はこの機に交野郡（現在の枚方市、交野市の一部）に移住したといわれています。

『続日本紀[しょくにほんぎ]』の記載によれば、敬福は豪放で酒を好み、聖武天皇の寵遇を受けたとされ、常陸守[ひたちのかみ]や讃岐守[さぬきのかみ]や刑部卿[ぎょうぶきょう]などを歴任し、天平神護2年（766）に、69歳で没しています。



桜が満開の百済寺跡

（写真奥は百済王神社）



その17

継体天皇

—けいたいてんのう—



(平成27年12月 1 日号—第299号)

継体天皇は、越前国坂井郡三国[みくに]（現在の福井県坂井市）にいた男大迹[おほど]王のことで、本市の楠葉で即位したと考えられており、枚方とゆかりの深い天皇です。

『日本書紀』によると、継体天皇の一代前の武烈[ぶれつ]天皇は、後継者がいないまま、506年に大和の泊瀬列城宮[はつせなみきのみや]（現在の奈良県桜井市付近）で崩じました。

翌507年、朝廷の有力者であった大伴金村[おおとものかなむら]は、後継者として、仲哀[ちゅうあい]天皇の五世孫で、丹波国桑田郡（現在の京都府亀岡市付近）にいた倭彦王[やまとひこのおおきみ]を迎えにいきましたが、王は、迎えの兵を見ると、恐れて姿を隠してしまいました。

翌年、金村は、応神[おうじん]天皇の五世孫の男大迹王を、皇位継承者として推せんしました。他の有力氏族も同意し、この王を迎えるため、三国に行きました。しかし王は、何かの陰謀に巻き込まれるのではないかと即位を承諾しませんでした。

そこで、男大迹王をよく知っていた河内馬飼首荒籠[かわちのうまかいのおびとあらこ]が密使を遣わし、擁立にかかわった有力氏族全体の願いであることを伝え、即位の承諾を求めたところ、王はこれに応じ、樟葉宮[くずはのみや]で即位しました。

樟葉宮の詳細な位置はわかりませんが、現在の交野天神社[かたのてんじんしゃ]（楠葉丘）の境内奥にある貴船神社付近が、樟葉宮跡の伝承地として府の史跡に指定されています。また、当地は「樟葉宮跡の杜」として枚方八景の一つに選定されており、鎮守の森の静ひつな雰囲気を訪れる人のいやしともなっています。

継体天皇は、樟葉宮で5年間過ごした後、山背[やましる]の筒城宮[つつきのみや]（現在の京田辺市付近）へ移り、その7年後、同じく山背の弟国宮[おとくにのみや]（現在の長岡京市付近）に移りました。政治の中心であった大和の磐余玉穗宮[いわれのたまほのみや]（現在の桜井市付近）に移ったのは、即位してから20年後のことでした。継体



樟葉宮跡の伝承地

（場所は楠葉丘2丁目）

福井市の足羽山「あすわやま」公園にある
継体天皇像



天皇には、即位に反対する勢力があったとも考えられており、この間の移動の経緯や出自、陵墓などさまざまな点があります。

例えば、陵墓に関しては、『日本書紀』には継体天皇を藍野[あいの]陵に葬ったとするだけで、所在地を明記していませんが、『古事記』には、「御陵は三嶋の藍陵なり」と記されています。宮内庁は、この藍野陵を太田茶臼山[おおだちやうすやま]古墳（茨木市）としていますが、天皇の崩年が6世紀で、古墳の築造時期が5世紀であると考えられることなどから、今城塚[いましろづか]古墳（高槻市）が、継体天皇の真の陵墓であるとする説が有力となっています。

57歳で即位し、在位25年に及んだ継体天皇の時代は、朝鮮半島における高句麗[こうくり]、新羅[しらぎ]、加耶[かや]、百濟[くだら]などの動向への対応や、九州では筑紫国造磐井[つくしのくにのみやつこいらい]の反乱など、大和国家の支配が動揺した時代であったと言われています。

継体天皇は、こうした国内外の情勢に対応し、磐井の乱鎮定から3年後の531年に崩じました。



その18

ケンペル

(平成28年2月1日号—第302号)



江戸時代、長崎の出島にいたオランダ商館長は、日蘭貿易のお礼に江戸に参府しました。その随行者が、道中記を残しており、枚方についても記述しています。1651年にドイツで生まれたケンペルもその一人です。

ケンペルは、大学で医学と博物学を修めた後、スウェーデンのペルシャ派遣使節として各地を回っていましたが、その後も安定した地位を得るより旅をする道を選び、当時、広大な地域で貿易等を行っていたオランダ東インド会社の船医となって、1689年にバタビア（現在のインドネシアの首都ジャカルタ）に渡りました。

そして、元禄3年（1690）には、オランダ商館長アウトホールンつきの医師として長崎の出島に赴任し、元禄5年（1692）まで2年余り日本に滞在しました。

滞日中、ケンペルは、日本の歴史、社会、政治、宗教、動植物などを自身のスケッチも交えて柔軟な眼で総合的に記述し、これが彼の死後、日本誌として刊行され、ヨーロッパの日本観に大きな影響を及ぼしたと言われています。

また、商館長の江戸参府に2度随行した経験を江戸参府旅行日記に残し、その中には、これ（今市・守口・佐太[さた]（・出口））に続いて約500戸の枚方の町がある。われわれは（大坂から）5里の道を進んで、午前9時半にこの町に着き、半時間休んで昼食をとった。ここには、たくさんの旅館や料理屋があり、わずかな錢で茶や酒を飲み、また、いろいろな温かい食べ物を食べることができるし、どの店にも、めかした若い女中がいと記されていて、宿場町枚方の当時の様子をうかがい知ることができます。



その19

五兵衛

—ごへえ—

(平成28年11月 1 日号—第305号)



江戸時代、淀川沿岸の村々では、堤防の防備や樋門の開閉をめぐる抗争がたびたび発生しました。五兵衛は、こうした抗争の犠牲者です。

淀川の川床が次第に高くなったため、淀川沿いの村々では、かんがい後に不要となった悪水[あくすい]を自村内で淀川に排水できず、下流に位置する村から排水せざるを得なくなりました。伊加賀・三矢・泥町[どろまち]・出口・走谷・中振の上庄[かみしょう]6カ村は、中振村と木屋[こや]村（現在の寝屋川市）の村境である赤井堤防に樋門を設け、赤井川を経て悪水を淀川に放流していました。

上庄の村々は、排水強化のため、樋門の拡張を幕府に訴えましたが、下流の村々は、排水による水害の発生を懸念して反対し、両者は対立していました。そのため、大雨が降ると、上庄の村々は、樋門が十分に開けられているかを見張り、下流の村々は、樋門や堤防を見て回り、壊れたところがないか、壊されはしないかと神経をとがらせていました。

文化4年（1807）5月下旬から降り続いた雨は、濁流となってあふれ、6月3日、伊加賀村の五兵衛らが樋門の番をしていたとき、ついに赤井堤防が決壊し、水が下流に押し寄せました。五兵衛らが堤防を壊したと思い込んだ下流側の人々が襲来し、逃げ遅れた五兵衛に暴行を加え、それがもとで数日後に五兵衛は亡くなってしまいました。

文政3年（1820）5月の大雨の後にも争論がありましたが、赤井堤防に新たな樋門を設けることで決着しました。この樋門は、先に犠牲となった五兵衛の名前を取り、「五兵衛樋[ひ]」と呼ばれるようになりました。



淀川 写真手前）へと続く赤井堤防の面影が
かすかに残る本市と寝屋川市の市境となる
道路 写真中央



その20

惟喬親王 —これたかしんのう—

(令和元年 5 月 1 日号—第320号)



惟喬親王は、平安時代の貴族で、承和11年（844）に文徳〔もんとく〕天皇の第1皇子として生まれました。母は、紀名虎〔きのなとら〕の娘の静子〔しずこ〕（三条院）です。

文徳天皇は、惟喬親王を皇太子にしたいと考えていましたが、藤原良房〔ふじわらのよしふさ〕の娘の明子〔あきらけいこ〕が文徳天皇との間に第4皇子の惟仁〔これひと〕親王をもうけると状況が一変しました。当時の最大権力者であった藤原氏と、紀氏の力の差は歴然としており、藤原氏の圧力により、惟仁親王は、わずか生後8カ月で皇太子になり、その後、9歳で即位して清和〔せいわ〕天皇となりました。

皇位への望みを絶たれた惟喬親王は、政治から遠ざかり、詩歌の世界に没入していききました。親王は、交野ヶ原にある別荘の渚院〔なぎさのいん〕を年ごとに訪れては花盛りの桜をめでたといわれ、親王につき従った側近が、歌人として有名な在原業平〔ありわらのなりひら〕です。

業平を主人公とした歌物語の『伊勢物語』では、親王や業平たちが、渚院で花の宴を楽しんだ様子が描かれています。それによると、従者たちは、桜の下で和歌を詠み、業平は、「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という有名な歌を残しました。これは、桜の美しさをたたえるとともに、親王の悲運を思いやる歌であったともいわれています。



渚院跡とされる旧観音寺の
鐘楼と梵鐘 場所は渚元町

貞観14年（872）、親王は、病のため29歳のときに出家し、比叡山麓の小野に隠棲しました。その後、寛平9年（897）に54歳で没しました。

渚院は桜が大変すばらしく、都の貴族にとって、あこがれの名所であったといわれていますが、その後、荒れ果て、観音寺と呼ばれる寺が建てられたとされています。観音寺は、明治3年に神仏分離により廃寺となりましたが、現在、その跡地には、鐘楼と梵鐘が残されており、ともに市の有形文化財に指定されています。



その21

シーボルト

(令和3年5月1日号—第332号)



フィリップ・シーボルトは、1796年、ドイツで生まれました。

1823年（文政6年）に長崎、出島のオランダ商館付の医師兼自然科学調査官として来日。私塾を開設し西洋医学を伝える一方、オランダ政府の命により、動植物や鉱物、民俗資料を集めました。

1826年（文政9年）、シーボルトはオランダ商館長の江戸参府に随行。当時、外国人が日本国内を自由に旅行することは禁止されていたため、シーボルトにとって日本のことを調べる絶好の機会でした。



現在の淀川の景観

長崎から江戸へ向かう道中、シーボルトは枚方に立ち寄っています。当時の枚方は東海道の宿場町で、淀川舟運の中継港としても大いににぎわっていました。彼が記した紀行文には、昼食をとった枚方宿のにぎわいや、若い女性が大勢いるまちの様子とともに、「枚方の環境は非常に美しく、淀川の流域は私に祖国のマインの谷を思い出させることが多い」と称賛しています。

1828年（文政11年）、オランダへ帰国する際、持ち出しを禁じられた日本地図などが積荷に含まれていることが発覚し、国外追放処分となりました（シーボルト事件）。帰国後は、日本で集めた資料や知識を基に、日本についての本格的な研究書である『日本』や、日本の植物、動物を紹介する『日本植物誌』『日本動物誌』などを出版。また、日本の植物を栽培し、ヨーロッパに普及させました。

国外追放が解かれた後、1859年（安政6年）に再び来日。幕府の外交顧問などを務め、日本研究を続けました。3年後、長崎から帰国し、1866年、70歳で亡くなりました。



その22

実 従

—じつじゅう—
1498年～1564年

(令和4年2月1日号—第337号)



実従^{じつじゅう}は、浄土真宗の教えを庶民に広めた本願寺第8世蓮如^{れんにょ}の末子（第27子）として、明応7年（1498）に生まれました。

実従^{じつじゅう}は、幼少期には大坂御坊（石山本願寺）で育てられました。永正3年（1506）に起きた教団改革の内紛に巻き込まれ大坂御坊を退出、京都で不遇の日々を送りましたが、同6年山科本願寺に移り、第9世実如^{じつによ}に仕えました。翌年に出家し、同13年には浄土真宗の聖典である『教行信証^{きょうぎょうしんしょう}』の相伝を受けます。

実如が亡くなった後、第10世証如^{しょうによ}に仕え、天文19年（1550）には、順興寺の寺号を与えられました。証如が亡くなった後は、第11世顕如^{けんによ}の後見人である慶寿院^{けいじゅいん}に『教行信証』を教授するなど本願寺の発展に尽力しました。

永禄2年（1559）12月9日、実従は枚方御坊（順興寺）に入寺し、67歳で亡くなるまでの5年間に枚方で過ごしました。その様子は実従^{じしんき}の日記『私心記』に記されています。

枚方^{しないまち}には実従入寺以前から寺内町が形成され、商人、職人のほか、金融や流通に携わる人々が集住していました。『私心記』には順興寺境内の造成、普請など環境整備をはじめ、実従と寺内衆による仏事やそれに伴う会食、囲碁や茶の湯、連歌などの様子が詳細に記され、当時の文化、寺内の生活がかいま見えます。



御坊山にある実従の墓とされる石塔
(場所は枚方元町4)

意賀美神社の梅



永禄3年2月3日、実従たちは酒食持参で万年寺に出かけ、梅見物をしました。また、同月28日には磯島の糸桜を見物に行き、舟で帰ってきています。

実従たちが訪れた万年寺は明治初年に廃寺となりましたが、梅の季節に万年寺山の意賀美神社を訪れると、約100本の紅白梅を楽しむことができます。

枚方元町の御坊山ごぼうやまの頂には、実従の墓とされる石塔が静かに建っています。



その23

申維翰

—しんゆはん—
1681年～没年不詳

(令和4年11月1日号—第341号)



申維翰^{しん ゆはん}は、1681年に朝鮮で生まれました。1713年に科挙^{かきよ}（官僚の登用試験）に合格、1719年（享保4年）には第9回朝鮮通信使一行の製述官（書記官）に選ばれ、来日しました。彼の文才は朝鮮の朝廷内で類まれなものと評されており、来日の際には、行く先々で日本の文人に詩文の交換を求められました。1748年（寛延元年）第10回朝鮮通信使訪日の際には、彼の消息を問う日本人も多かったそうです。

申維翰は、来日の際の道中日記と日本事情観察記をまとめた『海游録』^{かいゆうろく}を著し、江戸までの道中や日本の風俗、習慣について触れる中、枚方についても記しています。

『海游録』には、「薄暮^{はくぼ}の頃、平方（枚方）^{かん か}の館下にいたり、船を停めて食事をした。」とあり、「熟供^{じゅくきょう}（手の行き届いたごちそう）を用意していただいた。三使臣^{し しん}（朝鮮の使者）は船からおらず、余もまた船中に宿す。夜になって、霽月^{せいげつ}（雨上がりの月）は浦に満ち、棹^{さお}さして出発した。」と書いてあることから、枚方に夜半までとどまり、船上で食事をした様子がうかがえます。

朝鮮通信使は将軍の代替わりなどに来日し、江戸に向かう際には、多数の御座船^{ござぶね}で淀川を遡りました。川の流れに逆らって船を進めるため、沿道から綱で船を引っ張る綱引人足^{つなひきにんそく}が動員されます。枚方宿周辺の村の人たちも、申維翰の乗った船を引っ張ったことでしょう。



淀川の河岸



その24

菅原道真

—すがわらのみちざね—
845年～903年

(令和5年5月1日号—第344号)



すがわらのみちざね じょう わ
菅原道真は、承和12年（845年）、学者の家に生まれました。幼少より学業に
励み、学者としての最高位、文章博士（もんじょうはかせ）となりました。異例の出世を重ね、昌泰（しょうたい）2年
（899年）、右大臣の要職に任命され、左大臣藤原時平（ふじわらのときひら）と並んで国家の政務を統括
しました。

ところが、藤原氏の策謀により、901年、大宰府に左遷されます。

本市に残る伝説によると、道真が九州に向かう途中、馬が病気になったので里の人に預けました。その馬が死んだ後、埋葬した上に祠（ほくら）を建て、草（き）や切り藁（わら）を供えていたのが、いつの頃か「クサガミサン（草神さん）」（牧野本町1丁目）と呼ばれるようになりました。

また、道真は、小高い山の上で、都の方角を望み名残を惜しみました。道真を慕って娘の菟屋姫（かりやひめ）が後を追って来ましたが、着いたときには、既に道真



蹉跎神社の社殿

は旅立った後でした。姫は、足（さ）だ（さだ）ずり（蹉跎）して悲嘆の涙に暮れました。一説によると、ここから蹉跎という地名が生まれたとも言われています。

姫を哀れんだ道真は、自身の座像を作りました。これを村人が祀（しや）でん（でん）するために社殿（しゃでん）を設けたのが蹉跎神社（南中振1丁目）の起源とされています。道真にまつわる神社や旧跡は各地にあります。枚方にも残る旧跡を一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



その25

田中家信

—たなかいえのぶ—
生没年不詳

(令和6年5月1日号—第350号)



「河内^{たんなん}丹南 鑄物^{いもの}のおこり」とたたら唄にあるように、古くから河内は鑄物発祥の地と歌い継がれています。河内^{いものじ}鑄物師の活躍は、鎌倉時代に全盛期を迎え、鑄造された梵鐘^{ぼんしょう}は、東北、九州を除く全国に及んでいます。

その後、下級公家^{くげ}である真継家^{まつぎ}が、全国の鑄物師を統括するようになりました。河内^{まつた}国茨田郡枚方村（現在の枚方上之町）で古くから鑄物業^{いものぎょう}を営んでいた田中家は、元文3年（1738年）、真継家配下の鑄物師として、河内^{さうそうかん}国左右惣官鑄物師に任ぜられ、国中の鑄物師を統率するとともに、交野、茨田、河内（後に讃良^{さらら}）の三郡における独占的営業を許されました。田中家で鑄造された梵鐘の分布は、北河内だけでなく、その周辺にまで及んでいます。しかし、それらのほとんどは第二次世界大戦中における金属供出の犠牲となり、市内に残る田中家鑄造の梵鐘は、市指定有形文化財である廃渚^{はいなぎさのいん}院観音寺の梵鐘（渚元町）のみです。この梵鐘は、寛政8年（1796年）に田中家信によって鑄造されたもので、「牧方^{*}住田中河内大目^{だいさかん} 藤原家信」と文字が浮き出るように鑄造されています。



廃渚院観音寺の梵鐘

田中家では、江戸時代を通じて、近隣の人々が使う鍋や釜、農具なども鑄造していました。明治以降、日本各地に近代的な工場が造られてからも、伝統技術を守って営業を続けましたが、昭和35年（1960年）頃に廃業しました。

その後、鑄物工場と主屋は本市に寄贈され、移築復原後、昭和59年（1984年）に旧田中家鑄物民俗資料館（藤阪天神町）として開館しました。鑄物工場は、国内で



旧田中家鋳物民俗資料館の鋳物工場展示室

唯一、江戸時代の姿のまま残されており、
日本の鋳物技術と枚方の昔の暮らしを伝えて
います。

＊「枚方」のこと。



その26

宗 覚

—そうかく—
1639年～1720年

(令和7年5月1日号—第356号)



宗覚は、寛永^{かんえい}16年（1639年）に生まれ、延宝^{えんぼう}7年（1679年）から久修園院^{くしゅうおんいん}（楠葉中之芝2丁目）の住職となりました。

久修園院は、神亀^{じんき}2年（725年）、行基（668年～749年）が58歳の時に創建したと言われる、行基四十九院の一つです。この寺は、慶長^{けいちょう}20年（1615年）、大坂夏の陣の際に、逃げ込んだ豊臣方の兵が火を掛けたことで焼失しましたが、復興の依頼を受けた宗覚は、自ら本尊釈迦如来立像^{ほんぞんしゃかによらいりゅうざう}を修理し、寄附を集めて再興したことから、久修園院の中興^{ちゅうこう}の祖と言われています。

境内に祀られている、高さ6尺（約2メートル）の愛染明王坐像^{あいぜんみょうおうざざう}は、宗覚が、自身への母の心の深さに思いを馳せ、母の死後8年目に彫り上げたと伝えられています。

多才多能であった宗覚は、徳川綱吉の母桂昌院^{けいしょういん}の援助を受け、元禄^{げんろく}6年（1693年）に、東寺（京都市）の『両界曼荼羅図（元禄本）』^{りょうかいまんだらず}を制作します。これは重要文化財として東寺に所蔵されていますが、その際に、もう一枚複製したものが久修園院に所蔵されています。



境内の愛染堂に祀られている
愛染明王坐像



天球儀

また、元禄15年（1702年）頃に製作された天球儀（銅製。直径52センチメートルの球面に星座を示している。）や地球儀（張子^{はりこ}製。直径20センチメートルの球面に描かれている世界図の各大陸の位置や形状は、仏教的な解釈で配置さ

れている。)は、共に市の有形文化財に指定されています。

宗教活動はもとより、地理学、医学、天文学、絵画、工芸、音楽、武術などにも精通し、多くの業績を後世に残した宗覚は、享保^{きょうほう}5年（1720年）に82歳で没し、久修園院の境内に今も静かに眠っています。



地球儀